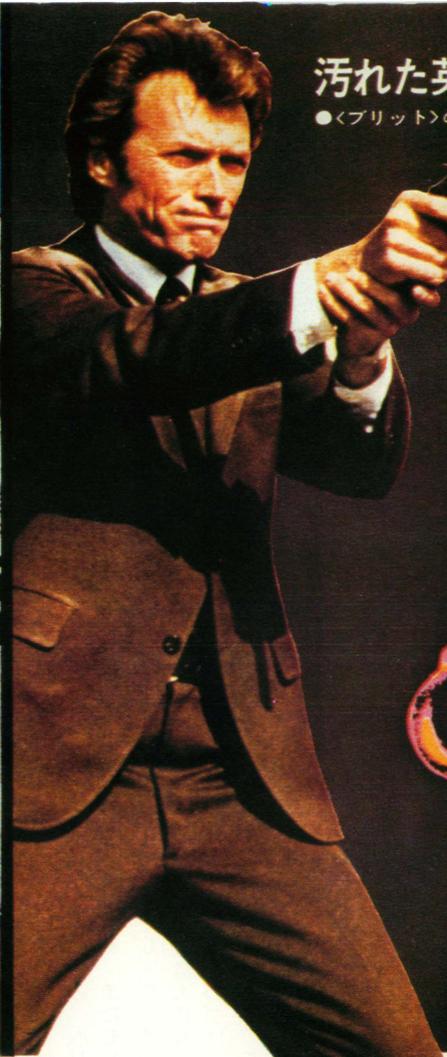
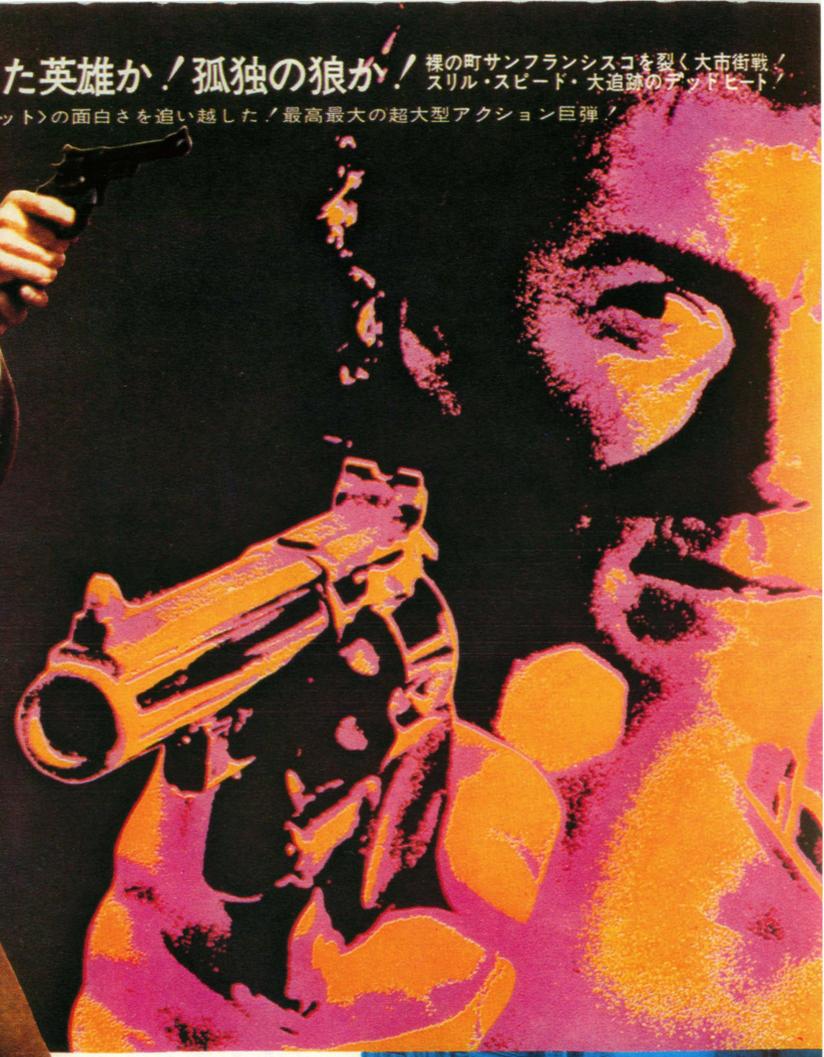


Clint Eastwood
Dirty Harry



汚れた英雄か！ 孤独の狼か！ 裸の町サンフランシスコを裂く大市街戦！
スリル・スピード・大追跡のデッドヒート！

●〈ブリット〉の面白さを追い越した！ 最高最大の超大型アクション巨弾！



■アクションの巨匠ドン・シーゲル監督■

ダーティハリー

クリント・イーストウッド / ハリー・ガーディノ / レニ・サントーニ / ジョン・バーノン

テクニカラー
パナビジョン



ワーナー・ブラザーズ映画
マルティン・スコセッティ作品



■強烈迫力場面の連続!

〈映画評論家〉 双葉十三郎氏

これは「ブリット」以来のハードボイルド探偵アクションであり、クリント・イーストウッドとしては「荒野の用心棒」などの西部劇のイメージを吹っ飛ばす現代感覚の痛快な活躍ぶりである。

ドン・シーゲルは一九四五年に監督になってからアクションを手がけてきたが、ここ数年来ぐんと腕をあげ、シャープで強烈でしかも面白い角度を持ったその演出は、ぼくを彼のファンにしてみました。今度の作品でも、一つの大きな角度がある。それはへ上から見たサン・フランシスコである。

開巻、屋上プールで泳いでいた美人が、向うの高いビルの上から狙撃されて即死する。殺人課のハリイ・キアラハンすなわちクリント・イーストウッドはその犯人がいたと思われるビルの屋上をしらへはしめる。ぐるぐると歩きまわる彼を追ってカメラも移動し、サン・フランシスコの全体をパノラマ的に展望していく。ヒッチコック監督の「めまい」や御存知「ブリット」もサン・フランシスコが舞台であるが、いずれもほとんど地上にカメラを置いていた。ここにシーゲル監督の新しい狙いがあるわけで、この全市を見おろすパノラマは、大都会の中に生死を賭けてうごめく人間たちのドラマという印象を強調する。

ハリイはすぐく敏腕だが荒っぽく意地っ張りでもある。この性格は、食堂に入っているとき近くで銀行強盗があることを察知し、出てきた犯人と射ち合っして仕とめる場面端端的に描かれているが、ここはシーゲルのハードボイルド演出の見せ場の一つでもあり、すごい味を出している。そして、うずくまっている犯人の一人に、向けられたものには大砲みたいな恐怖を感じさせる拳銃をつきつけ、弾丸がまだ残っているかどうかためしてみたいかとおどかす。このハードボイルドなやり方がラストにも用いられて迫力を盛りあげる。



■スタッフ
 製作・監督……………ドン・シーゲル
 製作総指揮……………ロバート・デイリー
 脚本……………ハリイ・ジュリアン・フィンク
 R・M・フィンク
 デイヴィン・リスナー
 ストーリー……………ハリイ・ジュリアン・フィンク
 R・M・フィンク
 撮影……………ブルース・サーティース
 R・M・フィンク
 音楽……………ラロ・シフリン
 ■キャスト
 ハリイ……………クリント・イーストウッド
 プレスラー……………ハリイ・ガーディノ
 チコ……………レニ・サントローニ
 殺人者……………アン・デイ・ロビンソン
 課長……………ジョン・ラーチ
 市長……………ジョン・バーノン

十万ドルよこさなければ市民をつぎつぎに殺すと宣言した犯人は一種の偏執狂であり、それが緊迫感をたかめる土台になっている。キチガイに刃物というが、誰がいつやられるかわからないのだからこわい。警察は犯人が屋上から狙撃するとにらみ、ヘリコプターを飛ばして捜査する。またもやへ上からの効果である。そして夜、教会の俯瞰。ハリイと相棒の

チコは大きなネオン広告のある屋上から監視をつつけ、向うのビルの屋上に犯人を発見する。ここでは、じまる屋上対屋上の猛烈な射ち合いがまた大きな見せ場でネオン広告が効果的に使われることになるが、ハリイの強力な銃が、発射の反動ではねあがる描写が一段とすさまじい迫力を生む。こうしてへ上からのサン・フランシスコの魅力が満喫させてから、ようやくカメラは地上にかえる。きたねえ仕事ばかり仰せつかるので、「ダーティ」ハリイとよばれるハリイが、そのきたねえ仕事の犯人に金を渡す役をさせられ、犯人の指示どおり動く場面も興味たっぷりだが、マウント・デヴィッド・パークにたどりついたところで、高くそびえる巨大な十字架が異様なムードの画面を構成する。この一連のシーケンスがまた見せ場だが、ハリイに足を刺された犯人の扱い方がすこ味を加える。

その犯人の扱いの特異な面白さは、ケザー・スタジアムの場面にもあらわれているが、ついに逮捕されてから、いよいよハリイの面目が発揮され、へ法の運用における大きな矛盾の問題が打ち出されてくる。ハリイはその矛盾に挑戦し、スクール・バスを乗取った犯人との緊迫感あふれるクライマックスを展開するのである。

クリント・イーストウッドはボーカー・フェイ的な演技の内部にいまにも破烈しそうな激情を秘めているのがよく、この作品で新しい人気が発するのではないかと思う。